四

坂崎磐音が父親の正睦の乗り物に従い、中之門を潜ったのは、五つ半を回っていた。

長い長い一日であった。

だが、その一日が終わったわけではなかった。

国家老宍戸文六が城から下がって屋敷に謹慎したあと、御直目付の中居半蔵は豊後関前藩の家臣たちを大広間に集め、江戸で起こったことや国許の出来事を説明し、藩主実高の意思がどこにあるかを話した。

その上で、

「一連の不正、長年の専横政治についての調べは、迅速に行ったとしても一朝一夕で済むものではない。そのために中老坂崎正睦をはじめ重役方の協力のもとに厳正かつ公平に行う。各々方は動揺することなく、それぞれお職務に精勤してもらいた……」

と語り、藩士たちの不安を抑えた。

中居半蔵はとくに、宍戸派と目された家臣たちに軽挙妄動をとるなと命じた。

その上で、

「裁きは来年実高様が関前にご帰国の後、御自らが携わって最終的に開かれよう。われらはこの折りに宍戸文六様が行われし悪政への報復をしてはならぬ。宍戸文六様には多年に亘る藩政において、失政もあれば功労もある。各々方はその功罪を見聞きしたのであれば正直に書き留めて、目付宛に提出していただきたい」

と、ことを分けて話した。

家臣たちの不安と動揺は消えて、城の内外では休息に平静を取り戻していった。

藩主江戸参府の最中とあって、豊後関前藩には重役もさほどの数は残っていなかった。

中居半蔵はまず国家老宍戸文六の代理として、中老の坂崎正睦を充てることを命じた。さらに宍戸文六の独断政治と不正に関する吟味に関わる重役たちが指名され、直ちに城中国家老の御用部屋の取り調べが始まり、金子や書類などが差し押さえられた。

さらに半蔵はその日の出来事などを、坂崎正睦、磐音親子に願って、それぞれの立場から詳細に記せしめ、自らの書面と併せ、早足の仁助に命じて江戸の福坂実高宛に送らせた。

中居半蔵がようやく安堵の表情を見せたのは、すでに城中に行灯が灯されたあとのことだ。

城中御台所から握り飯などの食事が届けられ、坂崎親子とともに食しながら話ができた。

「中居様、ご苦労にございましたな」

正睦が労った。

「此度ばかりは冷や汗の連続にございました」

と正直に答えた半蔵は、

「磐音どのがいなければ、こうも迅速に事が運ばなかったのは確か。助かりました」

と正睦と磐音の親子に感謝した。

「われら豊後関前藩は、藩政の立て直しに大きく遠回りを強いられておりますな。財政再建も、大きく後退したところから始めねばならぬ」

「正睦様、その上、有為な人材を数多く欠いての再出発にございますな」

「さよう。死んだ子の歳を数えても仕方ないが、白石孝盛、河出慎之輔、小林琴平、上野伊織らと、多くの家臣が亡くなった……」

「中居様、このまま文六様はおとなしく殿のご帰国を待たれるおつもりでございましょうか」

「いや、そうはなされまい。いずれ反撃の機会を窺われるはず」

それは三人の胸のうちの確信であった。

別府伝之丈らの家臣たちが宍戸文六の家老屋敷を封鎖していた。が、文六親子は謹慎を命じられたとはいえ、宍戸家の家来たちもいれば分家も控えていた。

「宍戸の分家はまず文六様と一緒の行動をとりましょう。こちらの警戒も必要ですな」

半蔵の言葉に頷いた正睦が言い出した。

「文六様の奥方の実家は、江戸に随行しておられるお手廻り組頭の香川男女之丈どのでしたな。屋敷には隠居の嘉太郎がまだ矍鑠としておられたはず。此度のこと、ご隠居にことを分けて話されることが肝要かと思われるが、いかがかな」

正睦の考えに半蔵が、

「それは気が付きませんでした」

と答えると、

「正睦様、この役目、引き受けてはいただけませぬか」

と顔を見た。

「それがしでよければ、これから直ちに香川家に出向こう。磐音、供をしてくれ」

正睦を乗せた駕籠は大手門ら左手の、香川家のある堀の内に向かって進んだ。

御番の辻を過ぎて、白鶴城の北側にお手廻り組頭の屋敷が見えてきた。

豊後関前藩六万石のお手廻り組頭は千六百石高、藩主の護衛の責任者であり、奥向きの小姓や奥番頭を統括する役職だ。

むろん隠居の嘉太郎も長年この役を務めたのち、嫡男の男女之丈に譲っていた。

香川家の門の大戸は閉じられていた。

磐音は通用口を叩き、門番に訪いを告げた。

「お待ちくだされ」

長いこと待たされたのちい、坂崎おヒャ子は通用口から通された。式台に控えていた香川家の老用人が、

「ただいま、主、出府中でござれば、通用口からお通しいたしました」

と断りを入れた。

「なんのなんの、かような刻限に訪問することこそ非礼にござる。嘉太郎様のご寛容に感謝いたします」

磐音は包平を抜くと用人に預けた。無益な誤解や争いを避けたいと思ったからだ。

「お預かりいたします」

と用人もそれを受けた。

正睦は無腰である。

磐音だけが脇差を腰にして嘉太郎の待つ座敷に通された。

隠居の嘉太郎は七十五歳、鶴のようにあせた体と頬のそげた顔に、眼光炯々とした双眸を持っていた。

その両眼が坂崎親子を睨んだ。

「ご隠居様、一別以来にございます。ご壮健の様子、お慶び申し上げます」

正睦の挨拶を手で制した嘉太郎が、

「正睦どの、挨拶は無用にござる。隠居の身にも城中の騒ぎは届いておる」

と厳しい声音で言い切った。

「ならばご隠居に正直に申し上げた後、正睦、お願いの儀がございます」

「そなたも、それがしの妹が宍戸文六どのの妻女と承知の上で来宅されたはず。早々に用件を述べられい」

正睦は頷くと、

「磐音、昨夏の事件に欠くさあ真相を告げよ」

と磐音に命じた。

磐音は江戸藩邸で行っていた修学会のことから、河出慎之輔、小林琴平との帰国、その後起こった一連の出来事に対する疑念など、江戸で殺された勘定方上野伊織の死を交えつつ話し、更に実高様からの命で関前に下向した経緯、西国屋次太夫を拉致して問い質したことなどを淡々と告げた。

話が終わっても嘉太郎は黙ったままだ。

「本日、城中で起こったことはそれがしの口から申し上げます……」

正睦が宍戸文六の命により大書院に喚問された経緯から、そこで起こったことなどを話した。

「……ご隠居様、これ以上の混乱と騒ぎを起こせば、関前藩は更に苦しい立場に追い込まれます。幕府が動かぬとも限りませぬ。藩と実高様のためにここは恩讐を超え、憎しみを忘れて、家臣一同心静かに、豊後関前藩になにが起こっていたのか、厳正に検証するときであろうかと考えます。ご隠居様、われら親子が罷り越しましたる微衷をお汲み取りの上、ご理解を賜りたくお願い申し上げます」

嘉太郎がかっと両眼を見開いた。

「そなたらの申すこと、嘘偽りはあるまいな」

「ございません」

正睦が嘉太郎の顔を正視して答えた。

嘉太郎の目が磐音を向いた。

「それがし、此度のことで関前に戻ろうと考えたは、偏に二人の友、河出慎之輔と小林琴平が亡くなった事件の真相を究明したいがためにございます。それが関前藩の改革に繋がると考えたからにございます」

言葉を切った磐音は、敢然と言い切った。

「ご隠居様、豊後関前藩の中興の祖宍戸文六様は、老いられましてございます」

嘉太郎は長いことを瞑目した。目を見開いたとき、

「それがしの妹はすでに宍戸の妻女、香川家の者ではないわ」

と呟いた。

「隠居の身とて、宍戸文六どのの専横、耳に入らぬわけではなかった。だが、香川の当主は男女之丈とて見逃してきたはおのれの罪、関前藩の禄を食んだ者として万死に値する。だがな、わしに文六の説得に当たらせようとしても無駄じゃ。わしの説得を受け入れるくらいならこうも独走はしなかったわ」

と言葉を切った嘉太郎は、

「わしにできることはただ一つ。香川家は、宍戸文六に与しては動かぬ。実高様のお心に従い、生死を共にするということだけじゃ」

「ありがとう存じます」

正睦が嘉太郎に頭を下げ、磐音も従った。

「磐音と申したか。河出慎之輔と小林琴平のこと、無念であったな。そなたら若い者たちが健在なれば、藩の改革も少しも早くできたものを。わしが生きているうちには再建は無理であろうな」

磐音は黙って頭を垂れた。

坂崎正睦を乗せた駕籠が再び御番の辻に差しかかったのは、四つ半の頃合であった。

「お疲れにございましょう」

「なんの、まだまだそなたには負けぬ」

と正睦が強がり言ったとき、御番の辻にあかりが点った。

「乗り物を塀に着けたよ」

磐音はすぐに陸尺に命じた。

松明の明かりに浮かび上がった人物は、白鉢巻に襷がけの宍戸秀晃に美濃部大監物、さらには宍戸家の家来と思える三人であった。小者二人が松明を掲げていた。

謹慎中の屋敷を抜け出てきたと思しい。

「秀晃どの、お立場を弁えなされ」

「坂崎磐音、そなたら親子を斬る！」

秀晃が叫んだ。

「宍戸秀晃、よく聞け。宍戸の家を潰してもよいのか」

駕籠から出た正睦が諌めた。が、秀晃は、

「問答無用じゃあ！」

と刀を抜いた。

家来三人も決死の覚悟を顔に漂わせて従った。

タイ捨て流の免許持ちという美濃部大監物も静かに鞘をはらった。

タイ捨て流は肥後の人吉に生まれた丸目蔵人佐長恵の興した流儀をいう。

蔵人は十六歳にして大畑の合戦に初陣して以来、幾多の戦場往来、真剣勝負を経験してきた達人であった。

タイ捨て流の免許皆伝なればなかなかの腕前である。

秀晃は正眼に構えていた。が、剣先がぶるぶると震えていた。家来三人が秀晃を囲むように固めた。

一方、大監物は剣をゆったりと脇構えにつけた。

堂々とした剣風である。

磐音は大監物の動きだけを注視した。

「父上、ご検分を」

磐音は手出しは無用、と父に告げた。

「存分に戦え」

それが正睦の返答であった。

磐音は頷き返すと包平を抜いた。

その瞬間、御番ノ辻に足音が響いて、提灯の明かりが飛び込んできた。

「おおっ、ここにおったぞ！」

別府伝之丈の声がした。

「伝之丈、謹慎中の者を逃したな」

「申し訳ございません。われら、坂崎様にご助勢つかまつります」

「ならぬ！」

磐音の声が厳しく拒絶した。

御番ノ辻で始まった事件である。

慎之輔と琴平と舞の仇がこの辻にはあった。

「手出しは無用じゃ。伝之丈」

磐音は重ねて言うと、包平を正眼にとった。

視線は美濃部大監物を見ている。

その体は小揺るぎもせず、どっしりとして磐音の様子を窺っていた。その静かな顔には、かたちばかりの用心棒とは思えない決死の表情が漲っており、憤怒が漂っていた。

磐音の手によって安楽源蔵ら仲間たちが斬り倒されていた。

（敵はおれが討つ）

の決意が漂っていた。

「参る！」

磐音は美濃部に言いかけた。と同時に一気に間合いを詰めた。

生死の境を越えてきた磐音の動きを読んだ美濃部は、一歩二歩踏み込むと、脇構えを磐音の胴に送って応じた。

磐音は正眼の剣で擦り合わせると、ふわりと勢いを殺した。

美濃部が絡め取られた剣を手元に引き寄せ、再び攻撃を加えようとしたとき、

「お、おのれ！若造……」

と大口を開けて叫びながら、秀晃が磐音の傍らから剣を振り下ろしてきた。

磐音は美濃部の剣を弾いておいて横っ飛びに逃れた。そこへ刀を振り回しながら秀晃が突っ込んできた。家来たちも仕掛けてきた。

腰が浮いたままの、手先だけの攻撃で秀晃の剣腕前が知れた。

磐音は秀晃を懐まで十分に引き寄せて、包平を肩口に鋭く落とした。

悲鳴とともに手応えが掌に伝わってきた。

秀晃が足をもつれさせて尻餅をつくように崩れ落ちた。

家来たちが二方向から飛び込んできたのを磐音の剣が弾き返し。

「そのほうら、引け、引くのじゃ！」

と命じた。

美濃部は手出しすることなく磐音の行動を見ていた。

美濃部と磐音、傷ついた秀晃と家来たちの間に伝の丈らが割って入った。

それを確かめた磐音は、

「待たせたな」

と大監物に言った。

磐音と大監物は、再び剣を構え直した。

間合いは一間。

相正眼である。

御番ノ辻に再び緊迫が戻って来た。ゆるゆるとした濃密で危険な殺気が満ち満ちてきた。

両者の目には互いの存在しかなかった。

二人は同じ構えで互いの仕掛けを待った。

辻を支配していた残暑の暑さに、秋の到来を思わせる涼風が混じった。

虫の音が屋敷の庭から響いていきた。

磐音も大監物も動かない。

正睦も伝の丈らも動けない。

袈裟に斬られた秀晃の呻き声が虫の音と混じった。

四半刻、半刻と刻限が過ぎていく。

大監物の顔が開けに染まって、息遣いが聞こえてきた。

磐音は待ちの姿勢にはいつまでも耐えられた。それが居眠り磐音の居眠り剣法の真骨頂だ。

大監物の眼が充血して見開かれた。

「おおうっ！」

大監物は大声を発すると、突進しながら正眼の剣を小さく振り上げ、鋭く磐音の肩口に落としてきた。

磐音は相手の動きに合わせて果敢に飛び込んでいった。

二つの剣が御番ノ辻の夜に絡み合い、火花を散らせた。

大監物は怪力を利して、ぐいぐいと磐音を押し込んできた。

磐音はずるずると後退した。

弾む相手の息遣いが磐音の顔にかかり、鍔競り合いが激しきを増した。

大監物の刃が磐音の額に迫った。勝ちを確信した大監物の恐ろしげな顔に、にたり

と笑みが浮かび、さらに剣に力を加えようとした。

その瞬間、磐音は絡み合った剣と剣の支点を利して、くるりと反転し、わずかに生じた力と力の間隙に包平を手元に引き寄せ、大監物の首筋に反撃を加えた。

さすがにタイ捨て流の免許持ち、磐音の反撃を弾き返すと前方に擦り抜けた。

両者は反転した。

元の位置に戻って、間合いは一間。

大監物の剣が八双に構えられた。

磐音は正眼に戻した。

すぐに大監物が動いた。

正眼の大包平がそのまま伸ばされて、突っ込んできた大監物の喉首に迫った。

袈裟に落とされる剣と喉笛に伸びた剣が生死の間仕切りで交錯した。

正睦と伝之丈らは息を呑んだ。

一瞬早く、刃渡り二尺七寸の包平の切っ先が大監物の喉を切り裂いた。

ばあっ！

御番ノ辻に血飛沫が舞った。

磐音は美濃部大監物の血を避けて、揺らぐ体のかたわらを擦り抜けていた。

どさり！

朽木が倒れるような地響きとともに勝負が決した。

呻き声にもにた低い歓声が辻に上がった。

その夜、国家老の宍戸文六が瀕死の秀晃を刺殺した後に自裁したことが伝わり、関前城下を震撼させた。が、これは予測されたことであった。

いったん屋敷に戻っていた坂崎正睦は中居半蔵の呼び出しで城中に上がった。

磐音は考えるところがあって、屋敷に残った。

その磐音の元に妹の伊代の姿を見せた。

「兄上、これからどうなさるおつもりにございますか」

「伊代、兄は一度坂崎の家を、関前藩を離れた者だ。そう軽々しく戻れるわけもない」

「兄上のお気持ちひとつにございます」

「それはもはや決まっておる。奈緒どののことをおしえてくれぬか」

伊代は頷くと、言い出した。

「奈緒様が岩城村庄屋陣左兵衛門様の離れた移られたこと、兄上はご存じですね」

「知っておる。東源之丞様が奈緒どのの手紙をとどけてくれたでな」

「その前後のことにございます。奈緒様の父上の助成様が再び倒れられたのでございます」

東源之丞にも中居半蔵にも聞いたことだ。

「すでに奈緒様のお覚悟は決まって板のでございましょう」

「身売りの覚悟と申すか」

伊代は頷くと、

「父上が蟄居閉門中でなければ、助けの手を差し伸べられたかもしれませぬ。が、我が家族は屋敷の出入りもままならず。その間に奈緒様は、城下橦木町の妓楼さのやに行かれて、百両にて身売りを決められたそうにございます。これらのことは、下男の河三が岩城村と橦木町のさのやにいって、ようやく聞き出したことにございます」

「奈緒どのは助成様の病気とお母上の暮らしを案じられて、身売りなされたか」

「はい」

と答えた伊代はさらに言った。

「奈緒様はすでに女衒と一緒に他国に発たれました。さのやは何処に奈緒様が行かれたか、どうしても河三には教えてくれなかったそうにございます」

頷いた磐音が、

「今少し耐えられれば、小林の家の再興も考えられたかも知れぬ……」

と呆然と吐き出した。

「兄上、奈緒様は兄上に手紙を残して行かれました。これは岩城村の庄屋どのが後日届けて来られたものにございます」

伊代は手紙を兄に渡した。そして、今一度同じ質問をした。

「兄上、どうなされるおつもりにございますか」

「伊代、関前藩には父上をはじめ、多くの家臣がおられる。再建には時間がかかろうが、必ずや成る。だがな……」

「兄上が預けられた二十五両、今、お持ちします」

「あの金は奈緒どののご両親に届けてくれぬか。そして、時折り顔を見せてやってくれ」

伊代は頷くと磐音の座敷を出ていった。

磐音は奈緒の封書を開いた。

＜坂崎磐音様、奈緒が磐音様にお届けする最後の手紙にございます。

奈緒の気持ちは生まれたときから死のときまで磐音様の御許に寄り添っております。

私にはこの道しか考えられませんか。

すでに兄なく姉なく、病に臥せる父と働くことなど生涯知らぬ母に、私ができるただひとつの道にございます。

お許しくだいさい。

私の身は遠く見知らぬ地にあっても磐音様のもの、気持ちはひとつにございます。磐音様のご武運とお幸せをお祈りしております。奈緒＞

磐音は手紙を握り潰すと、

（奈緒、なぜおれの帰りが待てなかった）

と胸の内で何度も詰った。

磐音の頭裏になぜかその光景が浮かんだ。

花芒の原がどこまでも広がっている。

風が吹き、白い穂が残照に赤く染まった。

原中を日どり旅する者があった。

奈緒だ。

奈緒は秋草の広大な海にぽつねんと孤影を引いて、遊里へと向かう旅をしていた。

（待っておれ、必ず助けに行く）

磐音は握り潰した手紙を懐に入れると、旅の仕度を始めた。